

大橋俊夫, 河合佳子●著

生きている しゅみがわかる 生理学

評者 本間研一

北海道大学名誉教授

このたび、医学書院から『生きている しゅみがわかる 生理学』が上梓されました。著者は、医学生理学界の重鎮である信州大学名誉教授(特任教授)の大橋俊夫氏と、新進気鋭の生理学者で東北医科薬科大学教授の河合佳子氏です。大橋俊夫名誉教授は循環生理学の泰斗で、同じ医学書院から出版されている大書『標準生理学』(第8版, 2014年)の編者でもあります。

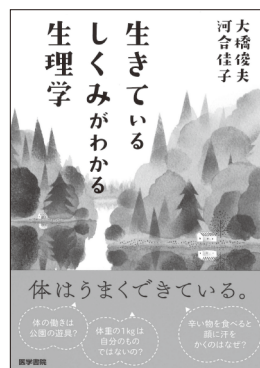
本書のタイトルは、生理学者からすれば同語反復に思えますが、著者の意図はまさにそこにあることが、一読してわかります。著者の長年にわたる生理学教育の経験から、学生さんの多くは、体系的な知識が網羅された生理学の教科書を読みこなして、「生きているしゅみ」を理解することが次第に難しくなってきたのではあるのではないのでしょうか。ましてやその学生さんらが将来医師や医療従事者となったとき、果たして患者さんに対して疾患の成り立ちや症状の「しゅみ」などを適切に説明できるのだろうかという老婆心が、本書執筆の動機の一つであると思います。

本書は4章から構成されています。各章のタイトルは従来の生理学に基づいていますが、その切り口は「歳をとると増えるシミやしわ、その予防に有効なのは?」(p.18)とか、「そもそも高血圧はどうして体に悪いのですか?」(p.62)など、親しみやすい問いかけでなされています。そこには、正規の教科書の内容をわかりやすく補足しようという著者の意図もありますが、それにもまして、「患者さんからこのような質問をされた場合、どう答えますか」という練習問題にもなっています。これで思い出したのですが、私が学生だった頃の生理学の試験問題は「摂氏40度の風呂に30分間首までつかっていたとき、身体にどのような現象が起こるかを記せ」でした。

医師や医療従事者の説明は一般にわかりづらく、多くの患者さんが煙にまかれたような印象を抱きま

す。それは、内容が日常的な出来事からかけ離れているだけでなく、医学においては常識である論理が、世間一般では必ずしもそうではないことからくる行き違いによることが多いようです。そのような時、本書の随所に記載されている生理学的な「考え方」と「説明」を駆使することで、患者さんとの行き違いを克服することができるのではないのでしょうか。

著者は、本書で「筋道を立てて論理的に考える学習の醍醐味」を、楽しんでほしいと述べています(「序」より)。生理学の教科書は、大学生が読めば理解できる内容と、読んでもなかなか理解しにくい内容があります。講義で取り上げるのは後者ですが、本書は副読本として医学生理学の講義に最適で、多くの教員の方に読んでいただきたいと思います。難しい生理学のしゅみを学生に理解させたときの達成感は、教師冥利に尽きます。



A5判・258頁
定価：本体2,300円＋税
医学書院刊，2016年